

令和四年度卒業証書授与式式辞

国安川ほとりの草木も息吹きはじめ、水が温かみ、山々では鳥のさえずりが春の訪れを告げ始めています。今日の佳き日に、P T A会長 森山しげる様、同窓会長 板倉定夫様はじめ、御来賓の皆様の御臨席を賜り、愛媛県立吉田高等学校第 74 回卒業証書授与式が挙行できますことは、我々教職員一同の大きな喜びであり、深く感謝し、厚くお礼を申し上げます。

ただ今、卒業証書を授与された 115 名の皆さん、卒業おめでとう。卒業生の御家族の皆様方には、入学以来、健やかな成長を願われての、三年間の御労苦と御慈愛に対しまして、深く敬意を表しますとともに、お子様が晴れの門出を迎えられましたことに、衷心よりお喜び申し上げます。

皆さんの学年は、入学時から新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、臨時休業や部活動制限、学校行事の中止など様々な制約を受けてきました。長引く不条理な出来事は誰しもが初めて経験することで、今までの価値観を崩されてしまうものでした。社会全体にどうにもならないという雰囲気が漂う中でも、本校では少しずつ活気を取り戻しながら、各種行事、部活動での活躍が形となって表れてきました。

本校創立の礎を築かれた山下亀三郎氏は、第二次世界大戦間近で自身の興した海運業が危機的な状況になりつつあったとき、次のようなことを社員に語っています。

「大雪、大風、大波など、いかなる天候も永久のものではない。必ず天晴れて波静かな日を迎える。この世界的大騒動も永久のものではない。いつかは世界平和が訪れる。」

そして、「泰然自若」という言葉を使われました。物事に動じず、自分を見失わないことです。今の時代にも重みのあるお言葉です。

同時期のことですが、『星の王子さま』の著者として有名なサン＝テグジュペリは、郵便輸送のパイロットとしても活動していました。その経験をもとに書かれた『夜間飛行』は当時の郵便飛行業者の苦悩と希望を描いています。『星の王子さま』の優しい印象とは異なり、自らの信念のためには犠牲を厭わない冷徹とも思える支配人の話です。パイロットが遭難し連絡がとれなくなった時、地上で困惑する社員に支配人が言いました。

人生には解決策などないのだよ。あるのはただ、前進する力だけだ。

その力を創り出さなければならない。そうすれば解決策などひとりで見つかるのだ。

一番の重荷を背負い葛藤している支配人ですが、自分が働く業界の発展のために嫌われることを承知で職務に専念する姿には、職業人としての誇りを感じるのです。私たちは学校や家庭での生活や友人との関係を通じて愛情を感じ、落ち着きや安らぎを与えられています。一方で、これから踏み出そうとしている社会では、目まぐるしく情勢が変化し、新しい価値観が生まれ、厳しい状況乗り越えていかなければならない場面との遭遇も予想されます。卒業生の皆さんの進路は、進学、就職、その分野等多岐にわたります。どの途を選んでも、皆さんには、社会の進展の恩恵を受けるだけでなく、他者と協働して課題解決に取り組みながら、次の世代に次々とバトンを渡すように、個々人を超えた人類全体をより強くし、前進させていくという使命と責任があるのです。生きていく上で温かさとしさの二面性はどちらも大切で必要です。皆さんなら、温かい心に巡り合い、助け合いながら、いかなる困難をも乗り越え、しっかりと前を向いて進むことができるかと信じています。

最後になりましたが、卒業に因み、松山千春さんの「卒業」という詩を紹介いたします。

こみあげる淋しさに 問いかけたのは 足ばやに過ぎた 時の流れ
青い空 青い海 風のささやき 帰らない日々が かけぬけて行く
だけど今 夢がある ささやかな 夢だけ
あしたがあるから

卒業生、及び、御家族の皆様、重ね重ねおめでとうございます。本日は、三年ぶりの校歌斉唱が予定されています。はじめての合唱が旅立ちの日になりますし、大声ではまだ歌えませんが、少しずつ広がっていくあしたを想像することができると思います。

卒業生がそれぞれの夢に向かって、おおらかな気持ちで、自分を見失わず、邁往の気概を持ち、前進していくことを祈念して、式辞といたします。

令和五年三月一日

愛媛県立吉田高等学校

校長 村井 浩昭